View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

6．倦怠感の増強により自尊心の低下を来たした患者へ IASM 理論を用いた看護援助

野村　亜矢　（群馬大院・保・看護学）
中村　真美，角田　明美
（群馬大医・附属病院・看護部）
堀越　政孝，塚越　徳子，二渡　玉江
（群馬大院・保・看護学）

【はじめに】 症状マネジメントの総合的アプローチ (IASM) とは患者のセルフケア能力に焦点を当て，その能力を最大限に活かしながら，患者自身で症状マネジメントできるアプローチ方法である．A 氏は，化学放射線療法の副作用症状や腎不全等によって出現した倦怠感の増強により，身体的苦痛を感じていた．それにより，セルフケア不足を生じさせ，自尊心の低下を来していた．そこで，自分で何とかしたいという思いが強い A 氏が倦怠感の症状を主体的にマネジメントすることで，A 氏の自尊心が尊重され自己効力感を高めることにつながると判断し，IASM の理論を用い看護援助を行った結果をここに報告する．**【研究方法】** 実習の同意が得られた A 氏に対して，倦怠感スケール (NRS) を使用し IASM の手順に沿って看護展開をする．**【結　果】** A 氏は NRS を使用したことで客観的に自分の状態を把握し，自己の生活習慣に応じて測定時間を調整するなど主体的な取り組みができるようになった．また，スケールに応じ活動と休息の調整を図りセルフマネジメントができるようになった．**【考察・結論】** 自分でしたいという思いが強い A 氏にとって，主体的に倦怠感を管理することで，自尊心が保たれ，自己効力感を高める要因となった．また，看護師に依頼をすることを甘えであると感じ頼みづらさがあったが，倦怠感の対処を一緒に考えることで，スケールの共通認識が図れ，A 氏とスタッフの距離が縮まり，依頼できるようになった．

7．怒りの中にある対応の難しい急性骨髄性白血病患者の援助　―ストレス・コーピング理論を用いて―

今井　洋子　（群馬大院・保・看護学）
関根奈光子　（群馬県済生会前橋病院）
藤本　桂子，神田　清子
（群馬大院・保・看護学）

【はじめに】 怒りの感情は，ある出来事に自分が脅かされ，対応できないことに脅威を感じ，不安，緊張が増すことで生まれる．攻撃的な発言を行い，看護師から「対応の難しい患者」と認識されている患者に対し，ストレス・コーピング理論を用いて看護支援を行い，看護師との関係性に変化をもたらしたため報告する．**【研究方法】** ラザルスのストレス・コーピング理論を用いた介入事例検討．**【倫理的配慮】** 患者本人から実習時に学会発表の同意を得た．また個人が特定できないよう配慮した．**【事例紹介】** A 氏は 60 歳代，男性，急性骨髄性白血病 (M2) と診断され化学療法にて寛解後，再発し造血幹細胞移植を受けた．急性 GVHD による下痢が出現した．**【結果・考察】** A 氏は，自己概念の揺らぎや連続した新奇性の出来事，先行きが不確かな状況が重なり，今までのストレッサーに対するコーピングでは，対処が困難な状況が生じていた．怒りは A 氏が崩れないためのコーピングであり，ストレッサーに対しての防衛機制が働いている状況が明らかになった．A 氏が効果的なコーピングができること，看護師との関係性の再構築に向けて看護支援を行った．結果，A 氏は不安を怒りとして表現していたことに気づき，不安を看護師に伝えることができるようになった．また看護師を労う言葉が聴かれるようになり，A 氏と看護師の関係性に変化が起きた．理論を活用したことで，看護介入する方法が明らかとなった．